

ス、條約より一世紀半の間、ロシアは遂に太平洋の要部たる日本海に、一の出口も持たなかつたのである。

其後露より數々黒龍江航行の許可を求めたけれども、清國は常に之を拒絶して居た。然るに一八四七年、ニコラス・ムラヴィヨフ伯が東シベリヤ總督に命ぜらるゝや、此時は露、米、英の太平洋發展の氣運漸く盛んになつて來た時であるから、大膽にして野心強きムラヴィヨフは、英が香港を取りて中部太平洋に勢力の盛んなるを慨し、之に對抗する策として、早くも黒龍江に着眼し、著任の翌年派遣した探検隊は行衛不明に終つたが、ムラヴィヨフは少しも屈せず、オホーツク海より沿岸測量船を派遣し、艦長の一人オルロフは一八五〇年黒龍江口を發見し、又ネヴルコイは同江を溯り、翌年ニコライエフスク及びマリインスクを起した。一八五二年には千島のウルップを占領し、翌年ブッセは宗谷海峽を通過し、樺太にアニワ灣を占領し、又西岸にツエ市

を起した。

一八五四年クリミア戦争の爲め、オホーツク沿岸各地宛の資料を輸送すべき船舶が、英佛の封鎖の爲め黒海を出ること能はざる爲めに、ムラヴィヨフは自ら黒龍江を通じて此資料を送るに決し、學者製圖者及び將卒千餘人を率ゐて、シリレスクより上船し、黒龍江口に至り、マリインスクに上陸して海路イルクツクに歸つた。之れは明らかにネルチンスク條約違反であつて、ムラヴィヨフは多少の衝突は期したに相違なかつた。しかも途中にて出會つた清の軍隊は露人と一戦を賭する意志もなく、其武器訓練の劣等なことを露人に知らしめたに過ぎなかつた。

既にして六隻より成る英佛聯合の一艦隊來りて、カムチャツカのペトロバウロスクを攻めて、之れを破壊した。一八五五年英國の一艦隊は黒龍江口に現れ、露の一艦を自燒せしめた。聯合艦隊は更にウルップ島に至つて之を占

領した。此間艦隊は露の艦船を見附け次第に破壊若くは捕獲したが、黒龍江岸の露國植民地を侵さなかつたのは、其邊の事情に通じて居らなかつた爲であつたと思はれる。何にしても聯合艦隊の活動は、其勢力に比して遺憾な處が多かつた。それでムラヴィヨフは一八五五年には、三回まで黒龍江の水路により兵士、植民、物資を輸送し、之に對する清國の抗議を顧慮せず、益々黒龍江地方に於ける勢力發展を圖つた。

既にして露國外務省の送つた大使プーチャンは、一八五七年黒龍江を下り、北マリンスクより軍艦に乗り、樺太を巡視せる後朝鮮に至り、朝鮮政府より巨文島に石炭貯藏所を置くの許可を得て、夫より勃海灣に乗込み、清帝に向つて、露帝の命に依る請求を致した。即ち先づ兩國境界確定の談判を促し、且つ若し滿洲割讓をするならば、其報酬として長髮賊平定に助力すべし、といふのであつたが、清廷は此交換條件を拒絶し、且つ境界の事に關しても確答を與へ

なかつた。

茲に於てムラヴィヨフは本國に歸り自ら對支那の衝に當る全權を得、黒龍江に至つて盛んに武威を示したので、さらでも英佛の爲めに連りに苦しめられつゝあつた清廷は、ムラヴィヨフに許すに、一八五八年五月の愛琿條約を以てし、之に依りウスリ河に至るまでの黒龍江航江左岸地、及びウスリ河以東の兩岸を悉く露國に讓つた。

之れと同時にプーチャンは、天津に於て清が英佛に許したると略同じき商業條約を結ばしめた。その後一八五九年、清廷が一時英佛に對して、強硬な態度を取つた際、露に對しても、愛琿條約を無視せんとしたが、其談判の爲めに送られたイグナチエフが北京に着した時は、恰も英佛聯合軍が北京に攻入る時であつたので、イグナチエフは清の大官の狼狽に乗じ、多少彼等の爲めに周旋する所ありて、報酬としてウスリ河と海岸との間ペートル大帝灣に至

るまでの地を悉く割讓せしめ、斯の如くして今の沿海州が露の手に入り、ウ
ラジウオストツクの基も開かるゝに至つたのである。之れロシヤの太平洋發
展の大進歩であつた。

露の發展は一面に於いて、米、英の太平洋發展の對抗競争である。

八 太平洋東岸中部に於ける英國の發展

英國にてはピットは一七八八年クックの報告に基き、罪人をオーストラリ
ヤに送つて其拓殖を計り、尙南太平洋の植民開拓を盛んに經營し、而して
北太平洋には、冒險なる英人は陸路或は海路より西して太平洋に達し、鯨魚、
毛皮獸其他の捕獲及び之に伴ふ諸種の事業に於て、露米人と競争した。

支那に於ける貿易は、東印度商會が有する特權に依り、之を一手に握り、他

の英人の單獨商業を許さなかつた。然し其制限が甚だ窮屈であつて、貿易は
廣東の一箇所に限り、取引は總てホンといふ支那の一組合の手を経ることを
要したのであるから、會社は一七九二年及び一八一六年、使を北京に派して、
貿易の便宜を増さんことを乞ふたけれども、清廷は之を許さなかつた。一八
三四年に至り、英國政府は東インド會社の支那貿易獨占權を廢棄して、何人
も之に従事することを許し、又政府の代表者を送りて、會社の代表者に代らし
めた。

此時英國には、ホイグ黨が種々の大改革を實行し勢力を得て、一八三〇年
内閣を組織して以來、久しく政柄を握つて居た。その外務に當つたパーマスト
ン卿は大膽にして精力絶倫の政治家で、且つ總ての讓歩を恥辱の如く感ずる
國家的慢心強き英人氣質を最も能く代表する人であつたから、其外交は常に
最強硬で、殊に文明劣等と見做す弱國などに對しては、威壓的高壓手段を用

みた。其部下も亦此意志を體して、英國の威力扶殖に勤めた。

支那に於て、東インド會社は商業上の利益を代表するが故に、成る可く支那人の尊大心を傷けることを避け、之が爲め多少英國々威を墜すことも辭さないで、時に北京に使節を送るに、甘んじて支那人をして之を朝貢者として取扱はしめたことは、我日本に於て、蘭の東インド會社が江戸に送つた奉幣使が、恰かも見世物の奇獸の如く扱はれて恥なかつたのと同様である。然るに今や英國政府の最初の代表者を送られたナピエル卿は、パーマストン式の英人氣質を極端に有する人にて、從來の關係には毫も顧慮する所もなく、短刀直入、英國の威嚴を示すことに熱中する人であつたから、世界の形勢を知らざる傲慢尊大なる支那官憲とは、衝突せざるを得ないのであつた。殊に阿片の輸入は支那政府の禁する所であつたが、英國の輸入額は之に依りて多く、當時支那の對露貿易は輸出超過五百ルーブルにして、對英貿易は輸入超過七百萬弗であつて。

之れ即ち阿片の密輸入の結果であつた。

支那政府も事を好まず、初めは國人を取締るに止めたけれども、英人の密貿易者は益々大膽になり、武装した船に阿片を満載して官憲を蔑視するに至り、終には一八三九年の阿片戦争を惹起し、英人は一八四一年廣東を、翌一八四二年鎮江を略し其結果、支那は一八四一年の南京條約に依り、香港を割讓し福州以下五港を開くことを約した。此香港割讓は大なる世界的の意味がある。西洋人が支那本部に於て地を得たのは之が始めであつて、英國太平洋中部に於て確實有利な中心を得た事は、彼が地中海に於てジブラルタル、マルタを得たに比して、軍事上同様の意味を有し、政事上、經濟上には更に大なる價值を有するのである。而して英國の香港獲得の年は、ペリーの日本に來たりしより正に十年前であることを記憶せよ。

其後支那は長髮賊の亂ありて國內疲弊し、而も大勢の推移を了解せず、尊

大保守の夢より覺醒しない清の大官等は、一方には自強の策を講せずして、他方には唯漫然排外を事とし、南京條約を履行しないので、遂にアロー號事件を生じ、而して國威發揚と世界政策發展を希望する佛のナポレオン三世は、英國と對支同盟を結び、一八五七年廣東を占領し、兩國の大使エルジン卿及び男爵グローは、露大使ブーチャチン及び米大使リードの賛助を得て、威嚇して和を議せんとせしも清廷聽かず、茲に於て一八五八年聯合軍は太沽を砲撃し、天津に逼つたので、清廷も茲に初めて和を講じ、天津條約に依り、南京條約の履行、賠償金支出、揚子江航行の自由、キリスト教徒の保護等を英、佛、露、米に許した。

然るに翌一八九九年英、佛公使が條約批准交換の爲め北京に赴かんとせしに、清官は之を拒んだので、兩公使は砲艦を以て太沽砲臺を攻め、反つて撃退された。茲に英佛は陸兵二萬人を派し、清軍を八里溝に破りて北京に入り、

清廷をして、前條約の履行償金追加を承諾せしめて、僅に局を結んだ。此際、前述せる如く露も亦利益ある條約を結んだので、英、佛、露が暗に勢力競争を爲せる跡が認められる。要するに皆同時に、利益を均分したのである。

九 日本の開國と其發展

米國のペリー提督が、初めて日本に開國を逼つた時は、如何なる時であるか、既に述べたる事を茲に簡単に繰返せば、露、米、英が西東南より各太平洋に於ける勢力發展を競つて、同時に日本に向つて突進しつゝあつたのであることが明らかである。

米國は一八一九年の條約に依り、イスパニヤをして北緯四十二度以北の太平洋沿岸地に對する權利を放棄せしめ、一八二四年にはロシヤをして北緯五

十四度四十分より南に膨脹せざることを誓はしめ、一八四八年のグアダルベ・イダルゴ條約に依りメキシコをしてテクスラス以西カリフォルニアに至る間の地を悉く割讓せしめ、之に依り米國は全く太平洋東岸中部全體を占めた。

露國はカムチャツカ、アレウト列島、アラスカを擁して、樺太千島に指を染め、而して一八四七年には野心満々たるムラヴィヨフが東部シベリヤの總督となり、英の勢力漸く太平洋中部に發展するに鑑み、黒龍江經營、沿海州併呑に著手した。

英國は北にはカナダ地方より太平洋に發展し、又南太平洋にはオーストラリア、ニュージールランド以下群島の主なる者を占め、一八四一年には支那より香港を取つて、獨り太平洋西岸中部に有利なる根據地を得たのである。

此等の諸國の人民は、其貿易の航路の衝に當る日本の鎖港を、甚しく不便に感せざるを得ないのであつた。従つて彼等が日本に開港を要求するとは、必

要上日に急を加へつゝあつた。即ち露はラクスマン、レザノフ、フヴァストフ以下數々我に逼つた。米も亦一八四八年ピットル提督を派遣して開港に對する幕府の意向を視はしめた。此外米、露、英の私社私人にて斯る請求を爲す者少からずあつたが、幕府は千遍一律に、祖宗の法は破る可からずといふて、之を拒絶した。而して商船、獵船、漁船等の我海岸に來りて薪水を求むる者相次ぎ、幕府は之に對して外面強硬を装ひ乍ら、内心不安を感ずるものゝ如く、多くは其要求を入れ、恰かも腫物に觸る様に取扱つて居た。然し漁船等の水夫等には不頼無智の者が多いので、上陸の上亂暴を爲し、捕へられて拘禁されたのも、稀には有つたらしく見へる。

ムラヴィヨフが、黒龍江沿岸オホーツク沿岸等の經營に勤むるを見て、米國は太平洋發展の競争に於て、其背後に落ちることを恐れたるものゝ如く、終に斷然日本の開港を實現せしめんことに決し、日本が若し溫和に承諾せざれ

ば、琉球を占領して根據地を得て、之を其貿易販路の仲繼所とせんとした。米國提督の來朝は、果して我日本に對する不意の出來事かといふに、必ずしもそうではないと思ふ。鎖港とは言ひ乍ら、清人蘭人は貿易を許されて居た。彼等の齎す物品圖畫丈けでも邦人の好奇心を刺戟し、更に海外の事情に關する知識慾を起さしめざるを得なかつた。而して此傾向は既に第十八世紀の初より認むることが出来る。一七一二年（正徳二年）新井白石の采覽異言を著し、其後吉宗將軍は西川如見、青木昆陽等をして洋書を講せしめ、又宗教に關せざる洋書の輸入を許した。第十八世紀の中頃には杉田玄白等の西洋外科術を唱ふるあり、平賀源内の電氣學を紹介するありて、之より蘭學大に勃興し、醫學理化學のみならず、地理歴史等に關して西洋文明の進歩を知り得ると共に、感動し易き我國民の事なれば、之を驚嘆憧憬する者、或は恐怖警戒する者が出來て來た。素、是等の人々は極めて少數ではあつたが、新説を

唱ふる多くの場合に於けるが如く、彼等の眞摯熱烈なる精神は、一種人心を動かすに足る魔力を持つて居たのである。而して外人の我國に來ることが次第に頻繁となるを見て、彼等の實力を了解する丈けそれ丈、我國の安全に關して憂慮の念を起さざるを得なかつた。林子平の『海國兵談』の如きは、斯かる愛國的憂慮の結果であつた。

幕府の局に當る人々も、全く西洋の事情を知らないではなかつたと思ふ。外人が頻々として來るの報知に接し、又長崎の蘭人より呈する『風聞書』に依りて歐洲の事情も臆氣ながら知り得るのであるが、一旦停滯状態に陥つた者は容易に活動しない、又活動を嫌ふのである。彼等は現狀維持を欲して、變化に應ずる勇氣がない。故に外國船擊攘を令しながら、外國船が來つて薪水を求むれば、之を與へて成る可く早く去らしめ、以つて一日の安を偷まんとするのである。彼等は擊攘に必要な兵備も爲さず、去りとして斷然開港する

の決心もなく、糊塗彌縫を之れ事とし、妄に人心を動かすと稱して、志士を禁錮し其書を毀つたのは、恰かも駄鳥が叢中に頭を挿むで危険を忘れんとするのと同一であつた。

而して林子平禁錮の年(寛政四年、一七九二年)に、露使ラクスマンが來り、之より年として外船の來らざるなく、我官民共に其刺戟を免るゝこと能はず、幕府も多少眞面目に國防を爲さざるを得なかつた。而して我國民中にも活動する者漸く生じ、近藤重藏は擇捉に木標を樹て(一七九八年)、伊能忠敬は蝦夷地を測量し(一八〇〇年)、高田屋嘉兵衛は得撫に木標を樹て(享和元年、一八〇一年)、間宮林藏は樺太を探檢して、世界に先ちて其島嶼なることを發見し(文化八年、一八〇八年)、更に黒龍江地方をも探檢した(一八〇九年)。

此間にレザノフの來朝(一八〇四年)、フヴォストフの寇(一八〇六年七年)、グロフニンの捕獲(一八一一年)、高田屋嘉兵衛と交換(一八一三年)等の事が

あつた。其後少しく小康あつたけれども、外船來朝は益頻繁となり、第十九世紀の中頃に至りて、外國の逼り來る勢は彌盛んになり、殊に阿片戰爭に關する蘭人の報告は、幕府の大官等をして、少からず憂慮の念を懷かしめた。尙ほ蘭人は數々歐洲の形勢を説き、之に對する外交上に覺悟を促し忠告する所あり、終に一八五三年のペリー渡來となり、翌年其再來するに及び、遂に和親條約を許すに至つたのである。

堤防一度決すれば、外人來朝の勢は滔々として最早や防止すべきでない。支那に於て小康を得た英のエルジン卿、佛のグロー男、露のプーチャチン等續々來りて和親條約を結んだ。和親條約とは讀んで字の如く外船の來朝に際し撃攘を爲さず、薪水其他需要品を供給するのであるから、之だけにて既に外人が日本を貿易の中繼所とする主なる目的は達せられた譯であるが、夫で勿論満足が出来るものでなく、米國は總領事ハリスを派して終に通商條約を爲

さしめ、而して他の諸國も亦終に其目的を達した。此際我邦では到底之を拒絶することは出来ないものであつて、若し強て反對せんとすれば、當時米すら初め琉球を占領せんとしたのであるから、露、英、佛に野心ある政治家の多かつた時の事とて、琉球、大島、蝦夷、對馬の如き島嶼の奪取される位のことには、當時の我實力を以てして、到底之を防ぐことは出来なかつた。さすれば、我國の其後の發展は殆んど機會を得なかつたであらう。

然しながら、此際遠勅といふ事が他の周圍の事情と聯結して、尊攘の叫聲が天下を動かし、終に維新の大革命を起すに至つたのである。此間下關砲撃、鹿兒島砲撃、露人の對島占領ありたれども、幸にして大事に至らずに終つた。尙ほ佛のナポレオン三世が幕府に助力して佛の勢力を東洋に植ゑんとしたのが、英國の反對運動と徳川慶喜の愛國心とに依りて行はれなかつたのは非常な幸であつた。由來、國家の衰亡は内亂に依り外國の干涉を招致するに基く

ものが多い、兄弟牆に閱げども、外其侮を禦ぐといふ教は、我國民の寸時も忘るべからざることである。

維新の初め、我國民は自己の弱點を覺醒し、大刷新を行ふに決したが、此際比較的外國の妨害を受けなかつたのは、一は強國相互間の嫉妬と、歐洲に於ける政局の變化とに基くのであつた。即ち千島樺太の交換(明治八年、一八七五年)は我に不利であつたが、其外露國の對馬占領(文久元年、一八六一年)が英國の抗議に依りて中止せられ、英の巨文島築城(明治十八年、一八八五年)が露の反對に依りて撤廢され、又一方に臺灣土蕃の征伐、琉球の廢藩の如きは甚しき妨害を被らなかつた。而して歐洲にては、一八七一年プロシヤがフランスを破りてドイツ帝國を建設し、歐洲の政局に大變動を生せしより、諸國は之が警戒に多忙にして、而して權力平均の爲め佛、露が獨、澳、以の三國同盟に對するに至つて、各國の植民政策は専らアフリカに集中せられた。

此間に於て我國の改革事業も漸く其緒に就き、軍備も充實し、羽翼成りて外侮を防ぐに足るのみならず、大に飛躍するの氣運に達したのである。

一八九四、五年の日清戦争に、世界は初めて我國の實力を知つたが、又同時に支那の弱點の豫想以上なるを暴露し、獨、露、佛の三國干渉を惹起した。而して同時に米はハワイを併合し、フィリッピンを取り、獨は南洋諸島を購買して共に大に發展を計り、次いで露の旅順、獨の膠州灣、佛の廣州灣、英の威海衛等の租借あり、支那は分割に逼り日、米は稍背後に落ちんとするが如き形勢であつた。

然るに英は其植民政策の困難より日本と結び、日本は英の資力の助を得て一九〇四、五年の役に於て露を破り、露の太平洋發展に大痛撃を與へ、滿洲を租借し遂に朝鮮を併合するに至り、太平洋上に於て一大勢力と成つたのである。之を要するに、日本は前述の各國相互間の嫉妬と、歐洲政局の整理と、植民

政策のアフリカ集中と、英國以外の列強が日本の實力を誤算輕蔑せる事と、此等の事情が相前後して、日本は殆んど云ふに足るべき妨害なくして、發展することを得たのである。之を天祐といへば云へるのであるが、天祐は之を利用する能力ある者にのみ有效である。

一〇 現下及將來の太平洋問題

日露戦役後、日本の太平洋に於ける地位は一般に認めらるゝに至つた。之と共に日本に對する猜疑嫉妬も出て來た。即ち日清戦争後は、從來大に利用するに足ると認められた者が、今や油斷の成らぬ者と見られ、之に對する警戒心さへ起つた。しかも目下の世界戦役は更に日本の地位を強固にした。

露國は何と云つても、其政治の中心が歐洲にあるのであるから、嚮に餘り

に日本の國力を誤算して、遠隔なる極東に力を致して大に手を焼いたことに懲り、爾來日本と手を握り、太平洋方面より少しく手を收めた。而して目下の革命で蜂巢を打いた状態であるから、其結果如何に成り行くや、今の所何人も豫想することは不可能である。然し若し露が幸にして分裂するか、縮小することがなく、能く再び強固な政策の下に統一するに至るとしても、大戦亂前と異り、國民の輿論が外交を支配するであらうと思ふ。

露の最大財源は穀物であるが、是等の農産物は主として南露の産で、今後其産額は益發展の望がある。此等の量に比して安價な穀物の輸出は、鐵道に依る可からずして、海路に依るのであるから、露國の經營に力を致す可き所は、黒海及び地中海にある。又露國の爲めに最も幸運の場合として、戦後の疲弊を脱して其國勢駸々として進むに至るとしても、其重要利害は、近東に在つて、獨若くは英との暗闘となるであらう。何れにしても、太平洋方面に於ける活

動は、以前の如く活發と成るまでには、餘程の年月を経た後の事であらうと思はれる。其間露は日本を敵とすることは最も慎むことであらう。

英は之に反してオーストラリヤを南太平洋に控へて居て、此等南方諸島の英人は發展の意氣中々に盛にして、其人口は驚く可き速度を以て増加しつつある。聯合帝國の理想を抱く英國としては、大にオーストラリヤ以下の人民の意向を尊重せねばならぬ。加之、支那に於ける其商業及投資も少からぬ者であるから、太平洋に對する注意は決して弛む筈はないのである。然し乍ら英國は獨及び露(二者共に強國として残るものとすれば)と根本的に反對な所があるので、其主力を之に對抗せねばならぬ。故に英國も亦成る可く現在に於ける日本との友情を繼續することを以つて利益と考へるであらう。

そこで米國は如何といふに、ペリー來朝の頃は却々意氣盛んで、琉球の占領さへ考へたのであるが、其後一八四八年にカリフルニヤに金鑛を發見し、

一八六七年に七百二十萬弗を以てアラスカ及びアレウト列島を購買し、之より内部の發展開拓に多忙であつたが爲め、太平洋の西岸に對しては殊に活動する所もなく、日本支那に對して頗る正義公道を重んずる態度に出た。然るに第十九世紀の末に至りて、國力内に充實し資本蓄積する及び、海外貿易の發展を計り、茲にハワイ併合、フィリッピン、グアムの奪取と成り、又支那に於ける投資の希望より、從來の超然主義を止めて在支那列強の行動に割込むに至り、殊に門戸開放、機會均等を唱道した。蓋し米國は最後に競争に入りたれば太平洋西岸に一の根據地を有せず、故に根據地を中心とする他國の勢力發展政策を打破して、自己の大資力を利用せんとするのである。

去れば日清戰役、北清戰役の頃、露國が一時太平洋發展に優勢であつた時、英は日本と同盟して之に對抗し、米國も亦日本に同情したのである。然るに日露戰後、日本の勢力發展すると共に、米國は其機會均等主義を障害さるる

を恐れて止まず、茲に兩者の間に感情の隔離を起したのである。加之、米國西部の日本移民に對して米人の人種的嫌惡と壓迫とは、益々相互の間に反感を培養したのである。

今双方の主張を聞けば、其正邪曲直は容易に判斷すべきでない。日本人中にも一時露骨に侵略論を唱へ、或は暴慢な行動を敢てし、其我國永遠の利益に大害あることを悟らない者があつて、少なからず外人の猜疑心を起こさしめたのは無理もないのである。又た彼の米國の滿洲鐵道購買の申込の如きは、實に人が血を流し、財を費し、國運を賭してまで得た所を、恣に金力で以て横奪せんとしたかの感を與へた。又米新聞記者等の日本人に對する無遠慮なる人種的惡罵讒誣の如き、我國人の反感を起さざるを得ぬのであつた。之等は皆多く不謹慎と誤解との致す所であるが、而も其背後には太平洋に於ける兩勢力の暗闘が含まれて居ることを忘れてはならぬ。

序論にも云つた如く、我日本は太平洋方面の主人公であつて、太平洋問題の最後の解決は我國の盛衰興亡に關するものである。目下の大戦亂に於いて、我國は地理的便宜より、太平洋に於ける勢力を著しく擴張しつゝある、而も戦後長く此順境を保ち得るやは大なる疑問である、英國がオーストラリア人の意向を迎へて、米と手を握り、南洋に於て日本に對し多少の壓迫を加へる時が來ないとも限らぬのである、米國は又獨り其大資本をシベリヤに注入して、日本を出し抜き、凡ての機會を奪取せんとするやも知れない、其外支那に於ける我投資が何處まで妨害されずに行はるゝやも疑問である、蓋し彼の北守南進の如きは既に陳套な語で、我々は太平洋の何れの方面に向つても發展する覺悟がなくてはならぬ。誤解する勿れ、我發展といふは平和的、經濟的、文化的發展にして、毫も侵略の意を含まぬものである、然らば我國は如何なる方針を取らねばならぬかといふに、

第一、正義人道を主として故なく他國の領土を侵略するの念を斷ち、而も經濟的拓發を計る事。即ち支那に於いては最近の石井、ランシング條約に依りて、我國の特殊の利益は認められたれば、正當なる投資を爲し工農礦を問はず充分の發展を遂げざる可からず、又カムチャツカ、オホーツク方面に於ける我特別漁業權の如きは小村、ウイット條約の最成功せる點であつたが、其期限は大正七年七月満期と成り、先頃露國假政府より破棄の申込があつたといふ。當局者たる者此邊に對して緊揮一番せず他國の爲に此方面に特殊の關係を作られなば、我國の受くる所の打撃は啻に經濟上の大損失のみに止まらないであらう。

第二、正々堂々たる方法に依り一度我領土となつた所は決して之を棄つ可からざると共に、又一度有する利權は決して妨害を受けざる事。例へば彼のドイツより取つた南洋諸島の如きは、比較的利權が大きくない（尤も夫でも決

して輕視すべきものではないが)からといふて、講和の際之を還付することは絶對に許すべきでない、既にオーストラリヤ人は本國に向つて、其占領諸島を決して還附せざる可きことを逼つた。之は最も敬服すべき所であつて、即ち還附は經濟上不利益となるのみならず、將來之が敵の手にあれば危険なる其根據地となり、我にありては便宜なる進出點となる。我は戰を欲せざるも、而も永久の平和は到底望む可からず、如何なる場合にも備なきは危険である。故に眇たる一小島も太平洋といふ大磐面上の重要な一石たることを記憶せよ。

第三、我外交を刷新すること。外交は國民的とならねばならぬ。外交官の爲す所と國民多數の意向と反背するは不祥な事である。對外政策に於ては黨派の區別を爲し、善き事でも反對黨に功を收めしむることを嫌ひ、悪い事でも自黨の爲す所は稱讚する如きは、外國人をして其國の輿論を尊重せしめぬ

こととなる。ポーランドの亡滅、オランダの衰弱、皆此黨派の争を外交に及ぼした結果である。國民は一方に他國民の利害感情を充分諒解尊重して、形式的威嚴に必ずしも重きを置かざると同時に、我現在及將來に對する必要な主張は毫も譲らざるの決心を平素より忌憚なく述べ、對手をして此國民的主張を侵すとの如何に危険なるかを認識せしめなければならぬ。又外交官を選ぶに當り徒らに條文を解釋することを以て能事終れりと爲す者のみを採らず、總ての方面に對して國民の必要及經歷を研究し、又た他國民の性質利害歴史等に注目し、常識大膽を以て事に當る底の人物を用ゐなければならぬ。要するに外交は從來各國が多く行ひ居たるが如き權謀術數を之れ事とする方針を斥けて、公明且勇健なる態度を取らねばならぬと思ふのである。

第四、必要な國防を充實する事、予輩は戰爭を好まず、軍備を以て生産的の事と認むるのであるが、各國の主張には各一理あり、従つて其が衝突

する時なしとせず、斯る時に當り一方の兵力が甚しく劣勢なる時は、其外交は軟弱とならざるを得ない。而して軍備優劣の差異が反つて戦争の勃發を促すことは、今回の大戦亂に鑑みても明らかである。ドイツにして十二分の勝算なかりしならば、今度の戦は或は開かなかつたかも知れないのである。又聯合國にして甚しく兵力劣等なりと信じたならば、屈服的讓歩を爲したかも知れないのである。先頃某所に於て、米國の某海軍士官が軍備擴張の必要を説くに當り、『吾人は平和を熱望す、併し乍ら軍備を充實して、以て對手をして平和を破るゝの危険なることを知らしめざる可からず』といふ意味の言を爲した。吾人は即ち之を以て至言とするのであつて、吾人が外國の爲めに我國民的必須要求を妨害壓迫せんとする時に、其國をして壓迫の極、我と兵火を開くことの危険を覺らしむるだけの軍備を設けて置かねばならぬ。『軍備は平和の保障なり』といふ語は陳腐の如くして不變である。太平洋問題を前に控えた我國民は

國防殊に海軍の充實は自衛上一日怠りて、百日の悔を残すべきでないのである。

第五、國民の健全なる精神を維持する事。軍備如何に充實するも、外交如何に巧妙なるも、國民の精神不健全なる時は、遂に永く太平洋の主人公たることを得るものでない。此點は今更ながら長々しく論ずるまでもない。吾人は誠心誠意各人の前に横はる太平洋問題の解決に努めて、先祖に對し、又子孫に對し申譯の無いやうな事をせぬ様にし、以つて大日本といふ永久的有機體たる國家を防衛しなければならぬと思ふのである。

(大正六年十二月)

史眼に映ずる世界大戦終

大正七年八月十六日印刷
大正七年八月十九日發行
大正七年九月十五日再版發行
大正七年九月廿七日三版發行

不許



複製

著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

箕作元八

大橋新太郎

山口信勝

愛善社

東京日本橋區
本町三丁目
博文館

史眼に映ずる世界大戦

奥付

正價壹圓四十錢

▷▷ 刊 近 ◁◁
編 九 第

大 ト ペ
帝 ル

ペートル大帝は、ロシア人が國父として尊崇措かざる稀世の英傑にして、素東歐邊陲の一半開國たるに過ぎざりしロシアをして世界の中原へ乗り出さしめ、以て今日の強盛を見るの道を拓けるものはれ一に彼れの功業に屬す、本書は、當時のロシアの國情より、密略能く其の帝座を保てる彼れの苦心を述べ、率先西歐文物を輸入して銳意國政民俗を改め、勁敵チャールス十二世と相抗争しつつ、着々其利權を國外に張れる彼れが經國偉蹟を叙して、大帝ペートルの面目を躍如たらしむと共に、ロシア勃興の情形を説いて明徹を極む。

る た 威 權
果 成 の 究 研

- | | | |
|-----|----------|-----------------|
| 第五編 | 偉國民の奮闘 | 正價 壹圓
送料 十二錢 |
| 第六編 | 武士道の華 | 正價 壹圓
送料 十二錢 |
| 第七編 | オルレヤンの乙女 | 正價 壹圓
送料 十二錢 |
| 第八編 | 北方の流星王 | 正價 壹圓
送料 十二錢 |

の 界 學 史
新 士 博 作 箕

- | | | |
|-----|---------|------------------|
| 第一編 | ギリシアの撥亂 | 正價 七十錢
送料 八十錢 |
| 第二編 | デーベの勃興 | 正價 七十錢
送料 八十錢 |
| 第三編 | 國士の經綸 | 正價 壹圓
送料 十二錢 |
| 第四編 | 偉傑の雄飛 | 正價 七十錢
送料 八十錢 |

學大國帝京東
授教學大科文
士博學文
八元作箕
著生先

西洋史新話

本美裝洋判菊編每
入挿畫密及圖地
乃頁十二百二 數紙
頁十五百四至

町 本 京 東

館 文 博

東京帝國大學文藝學部教授 萩野由之君著

史話と文話

大判洋装紙 三頁 製上 裝洋 洋判大 紙數三 頁十五 價正 壹圓八錢 送料 二十錢

著者萩野博士は、當代罕觀の碩學にして、其の蘊蓄深く、殊に國史國文に精通し、獨創的卓見に富むこと世既に知る處、この書は、博士が、吾が國民一般に國史國文の趣味を鼓吹すべく叙述せられたるものにして、日本歴史上の史實と文事に關する所説五十篇を輯む、機警なる批判、透徹せる識見を行ふに優麗簡雅の筆を以てす、史論あり、月旦あり、隨筆あり、咸なこれ金玉の名篇、一讀滋味雋味交々湧くものあり、歴史研究者の好侶たるべく、文藝愛好者の良友たるべし。

東京博文館發行 本町

著者 エンレバン 氏 長瀬鳳輔君譯

民主主義と自由

四六判洋装上製 正價六十五錢 送料六錢

本書の著者は、歐洲思想家中の巨擘にして、既に幾多の哲學・美術或は文學に關する著述あり、就中「十九世紀の基礎」の如きは、近來の一大傑作として、世に稱せらる。氏は本來英國人なりしも故國を辭して今や獨逸を以て理想的故郷となせり。然るに近來大戰の影響として『自由』或は『民主主義』なるものゝ、漸く獨逸國民の一部に勢力を有し、其思想界を攪亂しつゝあるを見て、氏は深く之を慨歎し、自ら筆を向して大に獨逸國民を警戒したるもの即ち本書也譯者は當代外國通の第一人者、簡淨明快の筆を以てよく原著の眞隨を傳ふ蓋し刻下喫緊の要書也。

法學博士 浮田和民君著

文明の世

四六判洋装上製 正價壹圓二十錢 送料八錢

東京博文館發行 本町

東京帝國大學法學科大學教授

野塚喜平次君著 法學博士

歐洲現代

政治及學說論集

東京博文館發行

全一冊 大判洋裝

總クローヌ製金字入

紙數 四百四十頁

正價 壹圓八十錢

送料 十錢

本書は政治學專攻者たる著者が最近數年間歐洲現代に於ける政治の實際と其學說とに關する研究の結晶にして曾て世に發表したる所なるも更に多くの訂正と増補とを加へて茲に刊行す政治の學理研究と憲政の眞正なる進歩を欲する識者の一讀を薦む

現代歐洲の憲政

正價 一圓五十錢

送料 十錢

本書は一氣呵成的產物にあらず、博士數年間の刻苦の結果なり、曾て國家學界雜誌及び法學協會雜誌に於て公表されたる所なりと雖も、更に最近の材料に據り、必要なる訂正増補を施し、大正二年三月下旬に至る迄の、現代歐洲の憲政を叙述し批評せり、政治の學理的な研究に志す者は固より、又苟も本邦憲政の發達を希望する人士は、須らく本書を熟讀すべきものなり。

最近歐洲列強の財政及金融

大判洋裝特製
紙數 五百五十頁
正價 二圓卅錢
送料 十二錢

法學博士 松崎藏之助君著

本書は最近歐洲列強及日本財政金融の變遷真相を明かにし如何に列強が這次大戰の爲めに財政的動員準備を試みつゝありしか如何にして戰時の財政を處理しつゝありしかを精叙して我邦人の蒙を啓かんとし豊富なる資料と最近歐米巡視中に目睹されたる的確なる觀察とを基礎とし明快精透なる文章と該博深遠なる識見とを傾注して本書成る豈啻に歐洲列強の財政金融とのみ云はんや洵に之れ我世界的日本の財政に對する活教訓たり嚴正批判たり敢て朝野の人士に薦む

博文館發行

東京帝國大學文學部教授

姊崎正治君著 文學博士

法華經行者の華 日蓮蓮者

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、紀傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、愛國の警策と感應の法樂と、奮戦の叫びと信仰の凱歌と參差照應の壯觀古今に冠絶す。忠實に上人の遺文に基き、佛教史、宗教學、宗教心理の通義に照して「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に之を日本の公衆に薦む

大判 總布函入紙數六百餘頁
筆蹟(コロタイプ)寫眞(凸版)十五枚
肖像寫眞版 大判地圖各一葉

正價二圓五十錢
送料内地十二錢

『大戰の爆發で、世界の大地震蕩し、人心は根柢から搖ぎ出した。地大に動いて、新な泉の湧くべき時、大破壊に續いて大建築の起べき氣運は、肅々として近きつつある。人性の本然を回復し、之を文明爛熱の火坑から救ひ出し、而して人間らしい生活の新世界に人世の醇化を貫徹するは人類今後の任務』此の任務に當るべき宗教如何。是れ本書が世の覺醒を要求する問題也。

新時代の宗教

全一冊

四六判洋裝函入
紙數四百六十頁
正價壹圓二十錢
送料八錢

東京 博文館 本町



